

# ことわざに見られる比喩の日中対照研究

——植物の生長に関わることわざを考察対象として——

銭 秀 双

## 1. はじめに

本稿は、植物の生長段階に関することわざを考察対象とし、それらに比喩がどのように存在しているかを明らかにした上で、中国語のことわざとの対照研究を行う。ことわざと比喩の関係を論じる上で最も重要な先行研究である武田（1992：143）では、「比喩と言えば隠喩をまっさきに思い浮かべるほど、隠喩は比喩らしい比喩であるが、ことわざにかぎって言えば、この比喩形式をもつものは多くない。」と論じている。しかしながら、隠喩は植物の生長段階に関することわざには様々な形式で見られる。日本語と中国語の両方でどのような形式の隠喩がこのタイプのことわざに表れるかを論じることが本稿の主眼となる<sup>(注1)</sup>。

以下、第2節では、ことわざの定義を確認した上で、日本語における植物の生長段階に関することわざの例を挙げる。第3節では、第2節でとりあげた日本語の例に対する比喩の考察を行う。第4節では、対照的な観点から、中国語における植物の生長段階に関することわざの比喩について論じる。まとめとして第5節を付す。

## 2. 植物の生長段階に関することわざ

植物は擬人化されやすく、自ら変化して生長する点で生物として共通性を有しているという提言が鍋島（2011：160）によってなされている。植物の生長に関わる「最初から最後に至る」までの過程を想像してみよう。一般的な植物の生長とえば、基本的に「種」（特に種蒔き）から始まり、そして「根」、「芽（芽生え）」、「花（開花、花咲く）」<sup>(注2)</sup>、「実（結実、実る）」などを経て、「葉（落葉）」で終わるのが普通である。本節では、このような植物の生長段階に関わる過程に従い、ことわざの用例を提示する。

---

(注1) 日中両国において「隣の花は赤い」（别人的花红）のような同じ表現、又は「炒り豆と小娘」（路边红杏人自摘）のような全く異なる表現も存在している。本稿は植物の生長段階に関することわざにとどまるが、日中両語におけることわざの全体対照研究の予備的な考察になるものである。

(注2) 実際のデータを収集すると、「花」に関することわざがかなり存在しているが、「花」よりも「開花」または「花咲く」の方が植物の生長状態の変化を明らかに反映しているため、「開花」、「花咲く」の表現に注目し、用例を集める。

## 2.1 ことわざの定義づけ

本稿の考察対象であることわざに関する定義の仕方が必ずしも研究文献の間で一致していない。ことわざに対して、改めて定義づけをする必要があると考える。

石田（2015：10）において、ことわざ・格言は二つ以上の単語からなっている点、そしてこれらの単語の結びつきが比較的固い点が慣用句に似通っていると言及されている。一方、慣用句とことわざ・格言の異なるところ及び両者の区別について述べられている。

まず、石田（2015：10）では、「灯台下暗し」、「能ある鷹は爪を隠す」ということわざの例を通して、ことわざは、日本の社会・文化的な知恵や価値観を示す機能と相手にこの知恵や価値観を伝えたり、忠告したりする機能を持つと指摘されている。これに対し、慣用句は、「足を引っ張る」、「口が軽い」などこのような機能を持つものではなく、何らかの動作や状態、また属性や性質を表していることが多いと述べられている。

また、句の構造の面、文法の面から慣用句とことわざ・格言の区別についても説明されている。具体的には、慣用句は（文字通り）句であるのに対して、ことわざ・格言は一つの文に相当する場合が多い。且つ、動詞慣用句は「一タ形」で過去の動作や出来事を表すことが多いのに対して、動詞を中心とすることわざ・格言は普通「一ル形」や「命令形」で使われることが多いとまとめられている。

また、日本の国語辞典における（辞典の全体的な名称を略とする）ことわざに対する解釈を見ると、表1のようにまとめられる。

【表1】 国語辞典におけることわざに対する解釈

辞典区分	新明解	広辞苑	広辞林	日本国語	岩波	旺文社	新潮現代
ことわざ	教訓	教訓・風刺	教訓	教訓や風刺	訓戒・風刺	教訓	教訓・風刺・真理

各国語辞典の解釈によれば、ことわざは長くない句であり、且つ、表1で示したように、ことわざはその句が伝達した教訓、風刺、真理に注目することが多いとわかる。これは、石田（2015）で述べられたことわざの持つ機能とはほぼ合致する。つまり、ことわざは短い句で教訓、風刺、真理を表すと定義することが適切であると考える。

## 2.2 日本語における植物の生長段階に関することわざ

以上のようなことわざの定義に基づき、日本語における植物の生長段階に関することわざの例について、近藤浩文（1982）『植物故事ことわざ』保育社、足田輝一（1995）『植物ことわざ辞典』東京堂出版、時田昌瑞（2000）『岩波ことわざ辞典』岩波書店に基いて取り上げる。一部のデータの出典は、インターネットの『ことわざ辞典オンライン』（<https://kotowaza.jitenon.jp/>）も参考にした。なお、一つのことわざが二つ以上の生長を構成する要素（生長段階に関する言葉）を有する場合、それぞれの構成要素の比喩を分析するため、同じことわざに対して複数回を取り上げることがある。例えば、後にあげる「根がなくても花は咲く」ということわざについて、植物の生長に関わる「根」と「花咲く」という二つの要素が存在し、それぞれの要素を考察するため、ことわざの用例として、両方で取り上げる。

日本語における植物の生長段階に関することわざは以下のとおりである。

### (1) 種（種、種まき）

- (1a) 嘘にも種が要る
- (1b) 権兵衛が種蒔きゃ烏がほじくる
- (1c) 蒔かぬ種は生えぬ
- (1d) 楽は苦の種 苦は楽の種

### (2) 根

- (2a) 舌は禍の根
- (2b) 根浅ければ則ち末短く、本傷るれば則ち枯れる<sup>(注3)</sup>
- (2c) 根がなくても花は咲く
- (2d) 根を断ちて葉を枯らす

### (3) 芽（芽生え）

- (3a) 焼き栗が芽を出す<sup>(注4)</sup>

### (4) 花（開花、花咲く）

- (4a) 石に花咲く
- (4b) 女寡に花が咲く
- (4c) 根がなくても花は咲く

### (5) 実（結実、実る）

- (5a) 実のなる木は花から知れる
- (5b) 実るほど頭が下がる稲穂かな

### (6) 葉（落葉）

- (6a) 一葉落ちて天下の秋を知る

(注3) このことわざは中国起源であることが確実であるが、日本においても使われるようになったため、ここで取り上げる。同様に、例(6a)も中国起源のことわざである。

(注4) このことわざについて、中村文哉氏の教示による。

以上のように、植物の生長段階に関する要素を「種（種まき）→根→芽（芽生え）→花（開花、花咲く）→実（結実、実る）→葉（落葉）」という順序に従い、それぞれのことわざを合計15例取りあげた。これらの中に、例(2a)「舌は禍の根」は実質的に、武田（1992）で述べられた「口は禍の門」と同じ類のことわざである<sup>(注5)</sup>。本稿では、「口は禍の門」と「舌は禍の根」をはじめ、これまでの先行研究を踏まえながら、植物の生長段階におけることわざの比喩を考察していく。

### 3. 日本語におけることわざの比喩

まず、比喩（本稿では、主に直喩、隱喩、換喩、提喩を指す）は重要なキーワードの一つであるので、その定義を確認しておく。榎山（1997）、森（2012）を参考にし、本稿における直喩、隱喩、換喩、提喩を以下のように定義する。

直喩：喩えるものと喩えられるものとの間に何らかの類似性が見られ、且つ、比喩であることを示す標識「ようだ」、「みたいだ」、「あたかも」、「まるで」等が表現のなかにあるものである。

隱喩：二つの事物・概念の間に何らかの類似性が見られ、一方の事物・概念を表す形式を用い、他方の事物・概念を表すという比喩。これは「aはbだ」という形をとる場合と喩えるもののみが文中に現れ、喩えられるものは隠されている場合がある。

換喩：二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

提喩：より一般的な意味「類＝上位カテゴリー」を持つ形式を用いて、より特殊な意味「種＝下位カテゴリー」を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩。

#### 3.1 表現形式から見ることわざの比喩

「口は禍の門」について、武田（1992：166）では、明示比喩であると示されていた。しかし、具体的に明示比喩とはどういう面で考えられているか、あるいは、どのように定義されているかを示されていない。武田（1992：167）は明示比喩に対し、たとえられるものが明示されていない表現を暗示比喩と名付けられ、その比喩形式としては、隱喩・提喩・換喩が考えられると提言されている。仮に、明示比喩（明喩）を直喩として捉えられても、「口は禍の門」という表現の中「ようだ」、「みたいだ」のような直喩である示す標識が見当たらない。

隱喩の形式面に関するより詳細な研究である山梨（1988）では、次のように述べ

(注5) 森（2012）の「豆腐にかすがい」、「糠に釘」、「暖簾に腕押し」のような同じ内容を違った表現で表している「類をなすことわざ」を参考にした。

られている。

一般に、たとえとしての類似性や関連性を示す表現が背後におかれた言葉のあやが隠喩とされている。しかし、この種の隠喩は、一般に予想される以上にいろいろなかたちで表される。たとえば、[A is B] の形式の連辞的な隠喩は、その典型例の一つにすぎない。

山梨 (1988 : 15)

その上で、山梨 (1988) は隠喩の形式のフレームを5種類に分けている。それぞれ、①連辞的隠喩 (例：男はオオカミである)、②主辞的隠喩 (例：狼が襲いかかってきた)、③述辞的隠喩 (例：彼は夢を食べて生きている)、④統合的隠喩 (例：ふと良心の鏡が曇る)、⑤文脈的隠喩である。山梨 (1988 : 15-19)

ここでは、焦点を①連辞的隠喩に当てたいと考える。連辞的隠喩というのは、[A is B] の形をした、つまり、A は B である (例えば、君の瞳は宝石だ) といったたぐいの表現である。言うまでもなく、この種の隠喩は、表現の形が注目され、隠喩の定義の一部である「a は b だ」という形をとる場合である。これにより、「口は禍の門」及び「舌は禍の根」ということわざをそれらの表現の形から判断すれば、山梨 (1988) で述べられたような連辞的隠喩を用いるといえよう。また、本稿で取り上げた例の中、例 (1d) 「楽は苦の種苦は楽の種」も連辞的隠喩であろう。

連辞的隠喩はことわざの表面から比喩を判断すること、言い換えれば、ことわざの形式から比喩であることが分かるものである。「直喩」もこのタイプに近い。直喩の場合は、示す標識 (みたいだ、まるでなど) がはっきりと表現の中に現れている。本稿では、連辞的隠喩と直喩をあわせ、ことわざの比喩について、その表現の形式から一見で分かるものを「表現形式による比喩」と呼ぶことにする。本稿において、直喩を用いることわざをも考察対象の一部にするが、取り上げた用例の中に該当する直喩表現が見当たらない。表現の形式からことわざの比喩を判断することに対し、ことわざの中に隠されている比喩をどのように分析すればよいかを3.2で見てみよう。

### 3.2 構成要素から見ることわざの比喩

3.1 では、表現の形式から見て明らかに比喩を有することわざを「表現形式による比喩」で規定し、その中に典型的な隠喩と直喩が含まれると考えた。一方、ことわざの比喩を分析する際、異なるフレームが存在することがある。ここでは、山梨 (1988) で提言されている隠喩のフレームを続けてみていく。フレームの分類の中、主辞的隠喩、述辞的隠喩、統合的隠喩に対するそれぞれの解釈がある。まず、主辞的隠喩について、「狼が襲いかかってきた」という例が取り上げられている。

この表現は、文字通りの表現としても使える。しかし、状況によっては、この

タイプの表現は、ある存在の行動ないし行為の“様態”を、主語の部分示されている動物の属性に託して叙述している修辭的な表現として理解することも可能である。たとえば、目つきのきつい危険を感じさせる男が突然襲いかかってきた状況を考えた場合、その状況を「狼が襲いかかってきた」のように言い表すことも可能である。

山梨 (1988 : 17)

逆に述語の部分に比喩的な修辭性があるものについて、山梨 (1988) では「彼は夢を食べて生きている」という例があり、この場合には、述部が慣用句として、空しい実質のない生活を比喩的に叙述していると述べられていた。もう一つのフレームは、統合的隠喩ということであり、これは主部と述部の両方に同時にみとめられる複合的な比喩表現も考えられると記述されていた。具体例として、森鷗外の「太郎兵衛は…現金を目の前に並べられたので、ふと良心の鏡が曇って、其金を受け取ってしまった」を出されている。

以上の隠喩的な表現の三つのフレームの共通点が見られる。以上の用例のいずれも表現の一部に焦点を当てており、表現全体を通して比喩を表しているわけではない。

中村 (1991) では、同じような状況を分析し、言葉の表現を構成している要素について、以下のように述べられている。

統合的比喩は、表現を構成している要素間の結合、あるいは、成分の呼応に、世間の慣用からの著しいずれが見られ、それによって生ずる意外性や非論理性が、その表現の比喩らしさとして受容主体に汲みとられる、という共通点が認められる。

中村 (1991 : 277)

これらの考え方をふまえると、ことわざを構成する様々な要素の間にも比喩が見られるということが想像できる。例えば、例 (1a) 「嘘にも種が要る」の「種」は「材料」の喩えであり、また、例 (5a) 「実のなる木は花から知れる」について、「実のなる木」は「大成する人」の喩えと見られる。このような「構成要素」からことわざの比喩を見ることは隠喩のみならず、他の比喩法を用いる場合もあると推測できよう。たとえば、例 (2a) の「舌は禍の根」ということわざは、「舌」という要素が「しゃべること」を喩え、これは明らかに人間の器官とその器官の機能の隣接関係に基づく換喩であろう<sup>(注6)</sup>。

(注6) 武田 (1992) では、「口は禍の門」に対し、「口」によって「ことば」を表すという道具と機能との関係であると説明されている。

### 3.3 全体表示と文脈から見ることわざの比喩

実際に、ことわざの比喩を分析するフレームとして、前述のフレームにとどまらず、ことわざ全体の比喩についても考えなければならない。

山梨（1988）では、隠喩の五つ目のフレームとして、文脈的隠喩というものがあった。この場合、言語的な前後の文脈やその表現が発せられる言語外的な文脈が問題になると記述されていた。また、中村（1991）によれば、文脈比喩、その表現形式が基本的にあらわすはずの言語的な意味と、それがその場であらわすことが文脈的に期待される臨時的個別の意味との対応に本質的な逸脱がある、という共通の性格が見られると述べられた。

これに対し、ことわざを文脈に置かれてその場の内容を喩える機能を有することはもちろんだが、ことわざは定型句という特殊な存在で、特に文脈に置かなくても、個体として我々の目の前に現れるときもその喩える機能が考えられる。ただ、ことわざを個体として使われても文脈に置かれてもいずれもことわざの全体表示に注目するのである。たとえば、「火中の栗を拾う」ということわざについて、その比喩を判断する際に、まず、表現形式から比喩が見当たらないし、また、ことわざの構成要素「栗」などからもその比喩を把握できない。この場合は、「火中の栗を拾う」の全体表示と文脈を見なければならない。このようなことわざの全体表示の意味合いから比喩を判断する場合、ことわざの「全体表示と文脈から見る比喩」と呼ぶことにする。つまり、ことわざ自体を一括りとして、そのことわざの比喩的な機能を扱うのである。本稿以下、「全体表示と文脈から見る比喩」というフレームを用いることわざを確認してみよう。

まず、隠喩を見てみれば、例 (2c) / (4c) の「根がなくても花は咲く」を挙げよう。これは「まったく事実無根のことでも噂が立つことがある」という意味解釈になり、根拠のないことの発生を植物に喩えられている隠喩である。また、例 (5a) の「実のなる木は花から知れる」ということわざは、「大成する人は幼少時からわかる」という植物の認知領域から人間の認知領域への転移が生じ、つまり、人間を植物に喩えられている隠喩と考えられる。なお、例 (2d)、例 (4a)、例 (5b) についても上述の例と同じ役割を有することわざである。

なお、本稿で取り上げたことわざの中、「全体表示と文脈から見る比喩」というフレームで見ると、提喩と見られることわざもいくつか見られる。提喩は先ほど述べたように、類で種を表す、又は種で類を表す比喩である。

たとえば、例 (1a) の「嘘にも種が要る」について、「嘘つき」という具体的なことより「何事にも準備が必要」への拡張と考えられ、つまり、「種」と「類」の関係が見なされる提喩的表現である。また、例 (3a) の「焼き栗が芽を出す」ということわざは、具体的な「焼き栗が芽を出せないこと」を用い、世間の不可能な物事を表している。これも下位カテゴリー（種）を通して上位カテゴリー（類）を表す提喩的な表現であろう。これらと同じ提喩的発想を持つことわざは例 (1b)、

(1c) も考えられる。ここまで、ことわざの「全体表示と文脈」というフレームで隠喩または提喩を用いることわざの例を見てきたが、実際の考察と伴い、隠喩と提喩のどちらかに関わっているについての判断に迷う場合もある。

森 (2011) では、隠喩と提喩の境界事例について述べられている。その中の一部を要約すると「慣用句、ことわざは慣用的意味に定着するプロセスにおいて隠喩と提喩のどちらが関わるのか紛れる現象がある。ことわざの中でも、どのように意味記述をするかによってどちらが適用出るかが揺れる例が存在する。」となる。

ことわざに関する分析について、森 (2011) では、「舟に刻みて剣を求む」という用例を取り上げられている。

典型的に使用される「人間が昔からのしきたりを愚かにも守って時代の流れについていけない」という状況で記述すれば、川の流れと時の推移との間のマッピングも含め、隠喩となるが、〈一つの考えにとらわれて多様な条件を考慮しないこと〉と述べれば、元の状況を含みこむこともでき、上位カテゴリーと下位カテゴリーの間の転義、則ち提喩ととらえることもできるのである。

森 (2011 : 145)

つまり、森 (2011) で述べられたように、上述のことわざは意味の記述の仕方・あるいは、捉え方によって、隠喩とも提喩とも考えことができ、両者の境界事例となっていると言えるのである。

これに従うと、植物の生長段階に関することわざにおいて隠喩と提喩の境界に置かれている例も見られる。例 (2b) の「根浅ければ則ち末短く、本傷るれば則ち枯れる」の一つの解釈として、「根が十分張っていないければ枝葉も生長しない、幹がいたれば枝も枯れる」という樹木の生長を人間界にマッピングした隠喩表現である一方、「基礎がしっかりしていない物事は発展せず、いずれ衰える」というような森羅万象を表している表現とも考えられる。この場合は、提喩と考えられる。

まとめに、異なるフレームに見られる日本語における植物の生長段階に関することわざの比喩の分析を表 2 で示す。(比喩が見当たらない場合、「×」で表示する)

**【表 2】異なるフレームに見られる日本語における植物の生長段階に関することわざの比喩**

ことわざの番号	ことわざの表現形式	ことわざの構成要素	ことわざの全体表示と文脈
(1a)	×	隠喩	提喩
(1b)	×	×	提喩
(1c)	×	隠喩	提喩
(1d)	隠喩	隠喩	×
(2a)	隠喩	換喩	×

(2b)	×	隠喩	隠喩 / 提喩
(2c)	×	隠喩	隠喩
(2d)	×	隠喩	隠喩
(3a)	×	×	提喩
(4a)	×	×	隠喩
(4b)	×	隠喩	×
(4c)	×	×	同例 (2c)
(5a)	×	隠喩	隠喩
(5b)	×	隠喩	隠喩
(6a)	×	隠喩	×

日本語における植物の生長段階に関することわざの比喩を表2のようにまとめた。まず、「表現形式からことわざの比喩」を見る場合、本稿において僅か2例が考えられる。それらは「aはbだ」の形で表している典型的な隠喩とも言える。また、「ことわざを構成する要素」の中、比喩を用いるのは11例が考えられ、それぞれは隠喩または換喩を用いることが分かった。さらに、ことわざを一括りにし、「全体表示と文脈」のフレームによれば、ことわざを用いる比喩は隠喩5例<sup>(注7)</sup>、提喩4例、さらに隠喩と提喩の境界に属するのは1例に分かれている。

#### 4. 中国語におけることわざの比喩

比較として、中国語の例をも取り上げる。中国における植物の生長段階の特徴は日本と同じ認識を持つことが想像できる。なお、日本語での植物の生長段階を表す「種（種蒔き）」、「根」、「芽（芽生え）」、「花（開花、花咲く）」、「実（結実、実る）」、「葉（落葉）」に対し、中国語では、「种子，播种」、「根」、「芽，发芽」、「开花」、「结果」、「叶，落叶」という表現になる。また、用例の収集について、宗豪（2002）『谚语新编』广西民族出版社、孟守介〔他〕（1990）『汉语谚语词典』北京大学出版社に絞って取り上げた。一部のデータの出典は、インターネット（<http://t.shznw.net/yanyu>）も参考にした。括弧内は日本語の直訳である。

##### (7) 种，播种（種、種蒔き）

(7a) 种是金，土是银，错过季节无处寻

（種は金であり、土は銀であり、季節が過ぎると探しても探せない）

##### (8) 根（根）

(8a) 根子不正秧必歪

（根が真っすぐでなければ、秧も必ず歪む）

(8b) 树高千丈，落叶归根

（注7）例（2c）と例（4c）は同じことわざであるため、ことわざの「全体表示と文脈」で捉えられる場合、一つのことわざにする。同じく、中国語の例についても同じ扱いとする。

(樹木は千丈まで伸びても落ち葉が根本に集まる)

(8c) 斬草要除根

(草を薙るのに根まで伐る)

(9) 芽, 发芽 (芽、芽生え)

(9a) 柳树发芽暖洋洋, 冬天不会有几长

(柳の芽が生えると、冬はそろそろ終わる)

(10) 开花 (開花)

(10a) 花有重开日, 人无再少年

(花は再開できるが、人間は少年時代に戻れない)

(11) 结果 (結実)

(11a) 枯树不结果, 谎言不值钱

(枯木に実はならない、嘘は価値にならない)

(12) 叶, 落叶 (葉、落葉)

(12a) 树高千丈, 落叶归根

(樹木は千丈まで伸びても落ちた葉が根本に集まる)

(12b) 离开群众的人, 就像落地的树叶

(群衆から離れた人はまるで枯れ落ち葉のようになる)

中国ではことわざの数は数え切れないほど存在しているが、植物の生長段階に関することわざの用例は比較的少なく、かつ、母語話者の感覚では、そういうことわざの使用頻度もそれほど高くない。本稿では、重なる例を含め、9例（実質的には8例である）を列挙した。中国語の例に対しても先述した三つのフレームで分析してみよう。

#### 4.1 表現形式から見ることわざの比喩

まず、「表現形式から見ることわざの比喩」について、2例が考えられる。それぞれ例(7a)「种是金, 土是银, 错过季节无处寻」と例(12b)「离开群众的人, 就像落地的树叶」である。(7a)「种是金, 土是银, 错过季节无处寻」(種は金であり、土は銀であり、季節が過ぎると探しても探せない)の形としては日本語の用例と似ている。つまり、「种是金, 土是银」は典型的な隠喩型(「aはbだ」, 「a is b」)のことわざと考えられる。例(12b)を「ことわざの表現形式」から見れば、直喩を用いることわざと見られる。例(12b)「离开群众的人, 就像落地的树叶」の日本語訳は「群衆から離れた人はまるで枯れ落ち葉のようになる」となり、これは直喩である標識「まるで」が表現の中に現れてくるのである。このようなことわざの表現形式から見る直喩型のことわざは日本語の用例の中に見当たらない。

#### 4.2 構成要素から見ることわざの比喩

また、「構成要素から見ることわざの比喩」について、日本語の場合、隠喩と換

喩を用いることわざが存在していると分析してきた。本稿における中国語の例について、隠喩型のことわざのみが見られる。具体例と言えば、例(8a)「根子不正秧必歪」(根が真っすぐでなければ、秧も必ず歪む)の「根」は「基礎、もと」の意味を指す。また、例(8b)「树高千丈，落叶归根」(樹木は千丈まで伸びても落ち葉が根本に集まる)という例を本稿において2回取り上げた。このことわざの構成要素としての「樹木」、「落ち葉」、「根」はそれぞれ「人(特に若い人)」、「年を取った人」、「故郷、地元」を喩えている隠喩的表現と考える。

#### 4.3 全体表示と文脈から見ることわざの比喩

ことわざを「全体表示と文脈」から見た場合、中国語の例として次のようなものは比喩とは考えられない。例(9a)「柳树发芽暖洋洋，冬天不会有几长」(柳の芽が生えると、冬はそろそろ終わる)、例(10a)「花有重开日，人无再少年」(花は再開できるが、人間は少年時代に戻れない)と例(11a)「枯树不结果，谎言不值钱」(枯木には実はない、嘘は価値にならない)である。これらのことわざはいずれも対句形式であり、ことわざを個体として分析される時、表現の前後は説明文のような形式になり、特に比喩を有することは考えられない。なお、例(7a)「种是金，土是银，错过季节无处寻」(種は金であり、土は銀であり、季節が過ぎると探しても探せない)ということわざの前半は対句形式となり、後半は説明文の形であるが、これも特に「全体表示と文脈」から見た場合比喩が見当たらない。

これに対し、「全体表示と文脈」から見た場合、例(8b)／(12a)「树高千丈，落叶归根」(樹木は千丈まで伸びても落ち葉が根本に集まる)は対句形式であるが、比喩となる。このことわざは「人間(特に若い人)はいくら業績を作っても年を取ると、地元に戻って余生を過ごす」という意味を指す。これは植物を用い、人間界を喩える隠喩と考えられる。ほかに、「全体表示と文脈」から隠喩と見られるのは例(8c)「斩草要除根」(草を省るのに根まで伐る)と例(12b)「离开群众的人，就像落地的树叶」(群衆から離れた人はまるで枯れ落ち葉のようになる)もあてはまる。例(8c)は、植物の表現を通して禍のことを喩えている。これは日本語の例の例(2d)と似ている。さらに、例(12b)は、群衆から離れた人の特徴を植物である落ち葉に表現されている。

中国語の例の中でも隠喩と提喩の境界に置かれている例が見られる。それらは例(8a)「根子不正秧必歪」(根が真っすぐでなければ、秧も必ず歪む)と例(8b)／(12a)「树高千丈，落叶归根」(樹木は千丈まで伸びても落ち葉が根本に集まる)が考えられる。これらの2例を隠喩で考えれば、いずれも植物の表現を通して人間(の営み)を喩えていることわざである。一方、これらのことわざは提喩表現と見られることもできる。例(8a)と例(8b)／(12a)は具体的な植物を用い、それぞれ「物事の本質・基礎をしっかりしないとイケない」及び「世間の物事は追及的に本質にもどる」という下位カテゴリーから上位カテゴリーへの転移と考えられる。

前節のように、異なるフレームに見られる中国語における植物の生長段階に関することわざの比喩の分析を表3で示す。(比喩が見当たらない場合、「×」で表示する)

【表3】異なるフレームに見られる中国語における植物の生長段階に関することわざの比喩

ことわざの番号	ことわざの表現形式	ことわざの構成要素	ことわざの全体表示と文脈
(7a)	隠喩	×	×
(8a)	×	隠喩	隠喩 / 提喩
(8b)	×	隠喩	隠喩 / 提喩
(8c)	×	隠喩	隠喩
(9a)	×	×	×
(10a)	×	×	×
(11a)	×	×	×
(12a)	×	隠喩	同例 (8b)
(12b)	直喩	隠喩	隠喩

## 5. まとめ

本稿では、武田(1992)の論述を巡って、これまでの先行研究に基づき(特に山梨(1988))、植物の生長段階に関することわざに対する比喩の分析を三つのフレームの観点から扱った。つまり、「ことわざの表現形式」、「ことわざの構成要素」、「ことわざの全体表示と文脈」を通してことわざの比喩を考えてきた。武田(1992)では、隠喩を持つことわざは多くないと指摘されたが、ここまでの分析でわかるように、この論述は妥当性が欠けている。本稿においてことわざの比喩を判断するのにいずれのフレームでも隠喩型のことわざの割合は低くないことが分かった。言い換えれば、隠喩型のことわざは比較的によく存在していることである。

このようなフレームに従い、中国語における植物の生長段階に関することわざの例についても取り上げた。「ことわざの表現形式」から見る場合、日本語では典型的な隠喩を用いることわざが存在するのに対して、中国語の場合、典型的な隠喩のみならず、直喩型のことわざも見られる。また、「ことわざの構成要素」から見る場合、日本語では、換喩と隠喩を用いることわざが見られる一方、中国語では、隠喩を有することわざしか見られない。さらに、「ことわざの全体表示と文脈」のフレームでことわざの比喩を捉えようと、中国語の用例の中、対句形式のようなことわざが存在し、その類のことわざにおいては、部分的には比喩表現が見られるが、全体表示においては比喩表現であるとは言えない。

最後になるが、本稿において植物の生長段階に関する要素の比喩的な機能を見てみよう。日本語の例によれば、「種」は「準備」や「苦勞」、「成果」や「収穫」、及

び物事の「原因」を表せる。また、「根」は「根本」、「もと」、「根源」という表現に使われる。「根」が地面に一番接近しているため、こういう安定さがほかの物事に対してもしっかりと保つこととこのように移転されていると考えられる。一方、「焼き栗が芽を出す」について、「あり得ないことや不可能と思われることが現実的になる」という意味になり、これは単なる「芽」だけでは、特に何を喩えているか明確ではない。これと似ているのは例(4a)の「石に花咲く」であり、比喩的效果が見られないのである。なお、「実」に関する二つの例について、人間の「成就」と「知識」を表している。「一葉落ちて」の「落葉」は、物事の「前兆」という意味になる。

これに対し、中国語の用例の場合は、生長要素の中、まず、「種」は「金」にたとえられていて、「種」自体の生長要素としての比喩はあまり見られない。一方、「根」の比喩的な機能は日本語の「根」と似ている。つまり、中国語の植物の生長段階に関することわざにおいても「根」は日本語のように「もと」を表すことが多い。また、顕著的に比喩的な機能を有するのは「落ち葉」であり、これは「年を取った人」のたとえである。

本稿は日本語における植物の生長段階に関することわざの比喩を確認した上で、中国語のことわざとの対照を行った。日中両語の対照を通して、比喩上に、共通している部分とずれている部分に分かれていることが分かった。そういう相違が生じた原因はことわざを構成する各要素の意味的な解釈が異なる場合があるからである。このような意味的なずれの認知的な考察は銭(2018)では「種」と「開花」を巡って考察したが、今後、より広い分野での対照研究をする必要があると考える。

#### 参考文献

- 足田輝一(1995)『植物ことわざ事典』東京堂  
 石田プリシラ(2015)『言語学から見た日本語と英語の慣用句』開拓社  
 宗 豪(2002)『諺語新編』广西民族出版社  
 近藤浩文(1982)『植物故事ことわざ』保育社  
 武田勝昭(1992)『ことわざのレトリック』海鳴社  
 銭 秀双(近刊)「概念メタファー<人間は植物>の日中対照研究」『日本認知言語学会論文集』19巻  
 時田昌瑞(2000)『岩波ことわざ辞典』岩波書店  
 中村 明(1991)『日本語レトリックの体系』岩波書店  
 鍋島弘治郎(2011)『日本語のメタファー』くろしお出版  
 棚山洋介(1997)「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に」『名古屋大学国語国文学』第80号 pp. 29-43  
 孟 守介[他](1990)『汉语谚语词典』北京大学出版社  
 森 雄一(2011)「隠喩と提喩の境界事例について」『成蹊國文』第44号 pp. 150-143  
 森 雄一(2012)『学びのエクササイズ—レトリック』ひつじ書房  
 山梨正明(1988)『比喩と理解』東京大学出版社

**参考にした辞典**

- 『広辞林』第6版(1984)三省堂  
『新潮現代国語辞典』第2版(2000)新潮社  
『日本国語大辞典』第2版(2000)小学館  
『広辞苑』第6版(2008)岩波書店  
『岩波国語辞典』第7版(2011)岩波書店  
『新明解国語辞典』第7版(2012)三省堂  
『旺文現代国語辞典』第11版(2013)旺文社

**データベース利用**

- 『ことわざ辞典オンライン』<https://kotowaza.jitenon.jp/> (2018年10月閲覧)  
『民間谚语大全』<http://t.shznw.net/yanyu> (2018年10月閲覧)

(せん・しゅうそう 大学院博士後期課程在学)